

イチゴ農家の経営構造の変化と当面する課題

—— 宮城県亘理町吉田地区の事例から ——

伊藤 和子・阿部 和枝

(宮城県農業センター)

Development and Present Subject of the Strawberry Grower

—— A case study in Yoshida, Watari-cho, Miyagi prefecture ——

Kazuko ITO and Kazue ABE

(Miyagi Prefectural Agricultural Research Center)

1 はじめに

近年我が国では、地域農業の担い手として中核農家が注目され、それを育成しようとする動きが数多く展開されている。そのためには、まず現在の中核農家がいかなる背景のもとでどう経営が変化してきているかを把握し、今後どのようにしていけば発展しうるかを明らかにすることが必要である。

そこでここでは、イチゴ産地として有名な亘理町吉田地区のS農家に焦点をあて、聴取調査により経営構造の変化と当面する課題を明らかにした。

2 地域の概況

亘理町は県南部に位置し、農家率46.4%、農家一戸当たり耕地面積114aと県平均をやや下回る野菜・果樹中心の町である。

でS農家が位置する吉田地区は、1980年農業センサスによれば、総農家数1366戸で、県平均と比べると農家率は58.9%と低いが専業農家率20.4%は高い。昭和45年から55年までの10年間に農家率は低下したが農家数ではあまり減少しておらず、専業と2兼が増加するといった階層分化が起きている。経営規模別では1.0ha未満層が40.5%と最も多く、農産物販売金額1位部門別の農家構成割合では水稲66.4%・施設園芸31.4%と比較的施設園芸の割合が高い地区である。

3 S農家の概況

現在S農家は、総耕地430a、水田300a・畑130a(うち30aは借地)を耕作し、経営内容は水稲作とイチゴを主体としており、地域内では平均以上層に位置している。

畑にはイチゴが作付され、栽培圃に1450m(内訳:ダナー500m・宝交早生300m・麗紅400m・女峰250m)、育苗圃30aとなっており、育苗圃については町外に借入する形をとっている。また栽培のほとんどは、株冷半促成・促成である。

また、畑作で使用する堆肥は町外から購入しており、現在では高清水や大河原から運搬している。

所有機械については、トラクタ・コンバイン・乾燥機等

の稲作機械がそのほとんどを占めており、稲作は機械化一貫体系をとり、より省力化されている。

家族構成は、経営主57才・その妻57才・後継者34才・その妻32才・後継者の子供2人・母1人の7人であり、農業には、経営主及び後継者の2夫婦4人が従事(250日以上)しており、また作業については、後継者夫婦が主体となっている(表1)。

表1 S経営の概況(昭和61年時) (単位 a, 頭, m)

項 目	内 容	備 考
所有耕地	総耕地 430a(30)	借地は岩沼市にある。育苗用30
	水田 300	
	畑 130 (借地30a)	
家畜	—	
施設	ビニールハウス 5,000 m	
所有機械	トラクタ 23PS コンドイン 3条 乾燥機 30石 トラック 2t 動 噴 田植機 4条 他	
家族	世帯主(57) 世帯主の妻(57) 後継者(34) 後継者の妻(32) 後継者の長女(9) 後継者の長男(5) 母(77)	
その他	堆肥は購入(高清水より1,000円/t) (59年時 大河原, 角田 2,000/t)	

4 戦前からの経営構造の変化

戦前S家は、近隣の集落から分家して現在地に居をかまえたが、当時は水田130aに畑100aを本家から移譲され、それに水田70aほどを借入していた目小作農であり、労働力は父・母・本人の3人であった。畑にはトマト・ナス・イチゴ等が作付され、汽車・リヤカーによりふり売りをしていった。その後農地改革により小作していた70aが自作地となり、水田200a・畑100a・計300aの自作農となったが、終戦直後父の死亡により労働力の主力は本人へと移った。結婚により労働力は増加し、25年以降には、戦前からの野菜の中の1作目であったイチゴが、トラクタ導入による流

